



校長室だより

令和6年度

5月15日

NO. 10

「ふるさと」を知り、感じ、生きる…学びを



代掻き



稚鮎放流



五月の陽光に体を輝かせる稚鮎は、気持ちよさそうに乙川を遡っていきました。愛知県の農業水産局水産課の方にアユのことを教えてもらい、漁業組合の方にも見てもらい、八日、四年生みんな、川にアユを放ちました。おそろおそろ、けれども愛情をこめて、旅立っていくアユに子供たちは「元気に戻ってきてね」と声をかけて、送り出します。男川では「やな開き」も行われ、いよいよアユの季節の到来です。

アユには「鮎」「香魚」「年魚」「銀口魚」など様々な名前があり、『古事記』にも名前が出てくる昔からなじみの深い魚です。（「鮎」は中国ではナマズを指し、「鮎」は日本独自の読みです。）平安時代から「春生じ、夏長じ、秋衰え、冬死す、故に年魚と名づくなり」と知られるよう、「年魚」と呼ばれ一年で一生を終えるアユの人生はドラマチックです。それぞれの季節を、自分の海と川（ふるさと）の中で生きるアユは、秦梨の「ふるさと学習」ともつながりがあるように感じます

秦梨「ふるさと学習」の大きな柱の一つ「稲作」も、五月阜月（田植えをする月）に、始まります。十四日には五年生が「代掻き」を行い、全校田植えに向けた準備を行いました。肥料をまき、よく混ぜ土を柔らかくする作業を、田の先生に教えてもらいながら、時には土と戯れながら、愛情をもって活動します。「田んぼの真ん中は温かった」と言うように、土のぬくもりや自然を自分の肌で感じながら、稲作りの大変さや人々の生活や営みを「ふるさと学習」を通して学びます。

子供たちのアユへの「元気に戻ってきてね」はそのまま、故郷を離れ社会に巣立っていく子供たちに対する、大人たちの言葉に似ています。そんな愛情に包まれ心の居場所となる「ふるさと」を、知り感じ、共に作っていききたいと願います。

◇学校田◇

今年の田の先生は、鈴木清美さんと畔柳浩司さんです。学校田も、秦梨市民センターと福正寺の間の田んぼに引っ越しました。全校田植えは、15日に行われました。